

第 16 章 大正文学とワイルド

石崎等は「ワイルドと大正文学」の中で「大正文学においてワイルド芸術が果たした役割は計り知れない」⁽¹⁾と述べているように、その様相もまた多面的である。ワイルドの作品をそのまま取り入れようとする翻案的なものから、テーマを利用したもの、また、作品中にワイルド関連の言及が見られるものなど、枚挙に暇がない。森鷗外、夏目漱石、島崎藤村については拙著『書誌から見た日本ワイルド受容研究（明治編）』（イーコン、2006年11月）で論じたのでの今回は、特に谷崎潤一郎、芥川龍之介、佐藤春夫、有島武郎を中心に取り上げておきたい。

（1）谷崎潤一郎

谷崎潤一郎(1886-1955)は明治41年(1908)9月に東京帝国大学国文科に入学したが、学費未納により明治44年(1911)に退学した。在学中に和辻哲郎等と第2次『新思想』を創刊している。永井荷風(1879-1959)が明治44年(1911)に『三田文学』に発表した「谷崎潤一郎氏の作品」によって文壇に登場することになる。谷崎の作品で直接ワイルドへ言及しているものは、明治43年(1910)10月の「The Affair of Two Watches」（『新思潮』第1巻第2号）がある。それ以外については、石崎等「ワイルドと大正文学」の中で次のように記している。

ワイルドと大正文学との関係は、潤一郎については、『サロメ』が『麒麟』『法成寺物語』、『秘密を愛する女』が『秘密』、『ドリアン・グレイの肖像』が『饒太郎』、『漁師とその魂』が『人魚の歎き』にそれぞれ影を落とし、⁽²⁾

谷崎潤一郎は大正8年(1919)3月には『ウキンダーミア夫人の扇』(天佑社)を翻訳している。また、「谷崎潤一郎とワイルド」との研究については以下の文献が参考となろう。本格的な研究は昭和に入ってからのものである。

- 1934年 4月 十一谷義三郎「谷崎潤一郎小論」(『ちりがみ文章』厚生閣)
- 1961年 6月 高田瑞穂「潤一郎とワイルド、ポウ」(『国文学』第6巻第7号, 学燈社)
- 1966年 9月 佐藤猛郎「谷崎潤一郎の戯曲におけるオスカー・ワイルドの影響について」(『学習院高等科研究紀要』第2号)
- 1971年 4月 小出博「谷崎潤一郎とワイルド」(吉田精一郎編『日本近代文学の比較文学的研究』清水弘文堂書房)
- 1971年 6月 橋本芳一郎『谷崎潤一郎の文学』桜風社
- 1972年 3月 福田陸太郎「欧米における谷崎文学の評価」(『東京成徳短期大学紀要』第5号)
- 1977年 3月 武本純一「谷崎のワイルド美学の曲解」(『大阪樟蔭女子大学論集』第14号)
- 1978年 3月 高橋宣勝「谷崎潤一郎とオスカー・ワイルド」(『外国語・外国文学研究』第24号, 北海道大学文学部)
- 1982年 12月 古川弘之「ワイルドと谷崎潤一郎——『信西』について」(『英米文学』第2号, 光華女子大学)
- 1983年 3月 鏡味國彦「『世紀末』イギリス文学と大正期の文壇——シモンズとワイルドの影響について——」(『立正大学人文科学研究年報』別冊第4号)
- 1984年 3月 古川弘之「ワイルドと谷崎潤一郎——『人魚の嘆き』と『魔術師』について」(『英米文学』第3号, 光華女子大学)
- 1986年 3月 古川弘之「ワイルドと谷崎潤一郎——『法成寺物語』について」(『英米文学』第5号, 光華女子大学)

- 1987年 3月 鏡味國彦「アーサー・シモンズとワイルドの波動——大正期を中心に」（『十九世紀後半の英文学と近代日本』文化書房博文社）
- 1988年 3月 大川裕「谷崎文学とオスカー・ワイルド」（『日本大学人文科学研究所研究紀要』第35号）
- 1992年 1月 堀江珠喜「谷崎潤一郎とワイルド」（『園田学園女子大学論文集』第26号）
- 1994年 6月 大川裕『美の冒険と殉教』大川和子
- 1995年 11月 中村真一郎「谷崎潤一郎の場合」（『再読 日本近代文学』集英社）
- 1997年 10月 井村君江「谷崎潤一郎」（山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店）
- 1998年 9月 福田陸太郎「欧米における谷崎文学の評価」（『福田陸太郎著作集』（第1巻）沖積舎
- 1998年 12月 渡邊正彦「谷崎潤一郎の分身小説——『青塚氏の話』論」（分銅惇作編『近代文学論の現在』蒼丘書林）

（2）芥川龍之介

芥川龍之介は大正5年(1916)に東京大学英文科を卒業した。在学中に菊池寛、久米正雄等と共に『新思潮』（第三次）を刊行した。卒業論文は『ウィリアム・モリス研究』であった。芥川龍之介とワイルドの接点について井村君江は次のように書いている。

芥川龍之介がワイルドの作品に触れた最も古いものは「中学五年の時 De Profundis を拾い読みせり」と記した日記の一文である。芥川がワイルドの作品中で最も関心を寄せいていたのは『サロメ』であった。⁽³⁾

『芥川龍之介事典』（増訂版）にも次のような記述があるので紹介しておきたい。

また芥川には未定稿ではあるが、ワイルドの『サロメ』と同じ材料に組んだ戯曲『サロメ』あり、『散文詩』としてワイルド『師』『弟子』の二編を訳してもいる。なお、日本におけるワイルド受容史を考える場合見逃せない。日本で最初に上演された『サロメ』の観劇記である『Gaiety座の「サロメ」』（『女性』大正一四・八）といった文章も書いている。
(4)

また、「芥川龍之介とワイルド」に関する文献には以下の者が参考となるので紹介しておきたい。

1925年 8月 芥川龍之介「『サロメ』その他」（『女性』第8巻第2号、プラトン社）

1959年 5月 加藤京子「芥川龍之介におけるOscar Wildeの影響」（『国語と国語学』第36巻第5号）

1971年 7月 芥川龍之介「Gaiety座の『サロメ』」（『芥川龍之介全集』第5巻、筑摩書房）

1977年 1月 井村君江「芥川龍之介の『サロメ』」（『牧神』第8号）

1977年 3月 笹渕友一「芥川龍之介「西方の人」新論——とくに比較文学的——」（『ノートルダム清心女子大学紀要』国語国文学編、第1巻第1号）

1979年 7月 兼武進「芥川龍之介とオスカー・ワイルド——「美しき描写」をめぐる——」（『桃山学院大学人文科学研究』第15巻第1号）

1981年 5月 兼武進「芥川『西方の人』の「ロマン主義者」について——ワイルドとの比較による覚書」（『桃山学院大学人文科学研究』第17巻第1号）

- 1985年 12月 菊地弘他編『芥川龍之助事典』明治書院
- 1987年 12月 笹渕友一「芥川龍之介「西方の人」新論——とくに比較文学的——」（石割透編『芥川龍之介・作家とその時代』日本文学研究資料新集、有精堂出版）
- 1990年 4月 井村君江「芥川龍之介の未定稿『サロメ』」（『「サロメ」の変容——翻訳・舞台』新書館）
- 1993年 7月 柴田多賀治『芥川龍之介と英文学』八潮出版社
- 1997年 10月 井村君江「芥川龍之介」（山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店）
- 1999年 8月 石割透編『西方の人』（芥川龍之介作品論集成、第3巻）翰林書房
- 2000年 6月 関口安義、庄司達也編『芥川龍之介作品事典』勉誠出版
- 2001年 7月 菊地弘他編『芥川龍之助事典』（増訂版）明治書院
- 2003年 12月 関口安義編『芥川龍之介新辞典』翰林書房

芥川は東京大学では、日本の美学学者の先駆者である大塚保治の講義を受けている。その時にはワイルドの童話が講義で取り上げられたこともわかっている。なお、俳優の芥川比呂志は長男、作家の芥川也寸志は三男、ナレーターの芥川隆行は縁戚に当たる。

（3）佐藤春夫

佐藤春夫は明治43年(1910)に慶應義塾大学文学予科へ進学したが、中退した。しかし、慶應では当時教授であった永井荷風に学んだ。後年、昭和5年(1930)に友人の小説家谷崎潤一郎の妻・千代に恋慕し、のちに譲り受けるといったスキャンダラスな事件もあったことは有名である。

佐藤が文壇に登場するようになったのは、いわゆる本間久雄との本間久雄訳『遊蕩兒』を契機に、大正2年(1913)6月に佐藤春夫は『スバル』（第5年第6号）に『遊蕩兒』の譯者に寄せて少し許りワイルドを論ず』を発表し、

一連の『遊蕩児』翻訳論争』として知られる論争が起きた。この論争が佐藤春夫の文壇デビューの大きな契機になったことも佐藤春夫とワイルドを考える上で興味深いものがある。⁽⁵⁾

佐藤がワイルドの詩をいくつか翻訳していることもあるが、佐藤とワイルドについては『田園の憂鬱』(1918)などの作品にワイルドの影響を見る研究もなされている。佐藤は奇しくもワイルドによって文壇に登場することになったのだ。佐藤の他の外国文学への傾倒振りについては以下の通りである。

西洋文学では、オスカー・ワイルド、ド・クインシー、E・A・ポオ、アナトール・フランス、アンデルセンなどのほか、コロッディの『ピノチオ』、ポルトガル尼僧の手紙『ぼるとがる文』、ジョン・ポリドリ『吸血鬼』(バイロン作と謳ふ)、ザッヘル・マゾッホの『毛皮を着たヴィーナス』など珍しいものも訳してゐる。⁽⁶⁾

「佐藤春夫とワイルド」については、昭和43年(1968)3月の井村君江「佐藤春夫とオスカー・ワイルド」(成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』明治書院)、昭和62年(1987)5月の鏡味國彦「アーサー・シモンズとオスカー・ワイルドの波動ー大正期を中心に」(『十九世紀後半の英文学と近代日本』文化書房博文社)、平成9年(1997)10月の井村君江「佐藤春夫」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店)がよい参考となる。

(4) 有島武郎

有島武郎(1878-1923)は学習院中等全科を卒業後、札幌農学校に進学し、明治34年(1901)にキリスト教に入信。明治36年(1902)に渡米した。ハーバード大学等で学び、ホイットマン、イブセン、ベルグソン、ニーチェなどの影響を受けたと言われている。さらにはヨーロッパにも渡り、明治39年(1907)に帰国。帰国後は、志賀直哉、武者小路実篤等と『白樺』に参加した。大正8年(1919)には代表作『或る女』を発表している。「燕と王子」は、大正13

年(1924)10月の『有島武郎全集』(第8巻、叢文閣)に収録されている。大正15年(1926)5月～7月には『婦人の国』(第1巻第1号～第3号、新潮社)に遺筆として「燕と王子」が掲載されている。これは、妹の長男の病氣見舞いとして書き送ったものである。「小序」には山本直正の署名で以下のように紹介されている。冒頭の部分を紹介しておくことにする。

一昨年は私にとつても大凶年でした。震災前私共の敬愛してゐた武郎叔父様を失つたしまつたからです。この『燕と王子』というお伽噺は、まだ私が小学校へ入学したばかりの頃、そうです明治三十八九年でしたか、風邪が因で永らく休校し、海邊に轉地療養してゐた折、伯父様が以前讀まれたお伽噺を思ひ出したからと云つて、自ら挿畫までして病氣見舞いの手紙へ入れて送つた下さつたものです。當時伯父様は二十七八歳で、農科大学の助教授として札幌に假寓してゐられたのです。(7)

ここには、文並びに画と共有島武郎氏遺筆とある。

特に *The Happy Prince* については平成16年3月の増満圭子「翻案童話『つばめと王子』に見られる有島武郎の子供観——原作オスカー・ワイルド『幸福な王子』との異同を中心に——」(『有島武郎研究』第7号、有島武郎研究会)をはじめ、研究が進んでいる。

(5) その他

石崎等「ワイルドと大正文学」の中で *Salome* の愛について次のように述べている。

ワイルドが流行したのは、明治末から大正にかけての10年ほどである。文化表現としての<サロメ>は、小説家や詩人を刺激し創作の発想源となった。高村光太郎は『冬の朝のめざめ』で「ヨハネの首を抱きたるサロオメの心を／我はわがこころの中に求めむとす」と詠んだし、北

原白秋は『桐の花』の中で「サロメ女王の驕奢を尽くした踊り手さばき」と表現した。田村俊子の『あきらめ』では客人が独逸で見たと云う『サロメ』の話から、今の新派劇のつまらないこと」に言及し、鈴木三重吉は「ね、サロメですかあの句は。――恋の女の目に何ものか見えざるといふのは。」（『女』）と用いた。⁽⁸⁾

それ以外にも、後半では吉田絃二郎、金子光晴(1895-1975)、泉鏡花(1873-1939)、横光利一(1898-1947)などの名前も出て来ている。

ワイルドが日本文学に与えた影響については、いわゆる比較文学の領域でこれまで扱われて来た。特に三島由紀夫についてはワイルド論を発表、『サロメ』上演の演出を担当するなど、ワイルドに積極的に関わって来た。大正時代におけるワイルドの影響については、まだまだ研究はこれからだ。例えば井上謙他編『横光利一事典』（おうふう、2002年10月）には項目として「ワイルド」や彼の作品は取り上げられていないのである。しかし、その参考文献目録を見ると、吉田司雄「横光利一・比較文学的断章（一）ードストエフスキー・ワイルド・イプセン」（『媒』第6号、1989年12月）が紹介されている。⁽⁹⁾ 谷崎、芥川、有島との比較文学研究は進んでいるが、それ以外の文学者については、今後はこうした文学者への影響関係についてさらに研究が進むことが期待される。

参考資料

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」（『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001年6月）

谷崎潤一郎記念館 <http://www.city.asihya.hyogo.jp/shizen/tanizaki/>

新宮市佐藤春夫記念館 <http://www.city.shingu.wakayama.jp/culture/haruo0.htm>

横光利一文学会ホームページ <http://www.yokomitsubgk.hp.infoseek.co.jp>
泉鏡花記念館 <http://www.city.kanazawa.ishikawa.jp/bunho/ikkinen/index.html>

注

- (1) 石崎等「ワイルドと大正文学」（山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月）、p.502.
- (2) Ibid., p.503.
- (3) 井村君江「芥川龍之介」（山田勝編『オスカー・ワイルド事典』）、p.530.
- (4) 菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典』（増訂版）（明治書院、2001年7月）、pp.547-548
- (5) 谷沢永一「『遊蕩児』翻訳論争 佐藤春夫——本間久雄」（長谷川泉編『近代文学論争事典』至文堂、1962年12月）を参照。
- (6) 須永朝彦編『佐藤春夫』（日本幻想文学集成⑩、国書刊行会、1992年2月）、p.257.
- (7) 山本真正「小序」（『婦人の国』第1巻第1号、新潮社、1925年5月）、p.195.
- (8) 石崎等「ワイルドと大正文学」、p.502.
- (9) 井上謙他編『横光利一事典』（おうふう、2002年10月）、p.527